【農林水産大臣賞】

1　受賞団体：一般社団法人そらの郷

所在地：徳島県美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町

代表者：理事長　松浦　敬治氏

2　むらづくりの背景・動機

にし阿波地域（美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町）は、急峻な山岳地帯に広がる独自の景観と文化を有する一方、人口減少や高齢化、耕作放棄地の増加といった課題に直面していた。

これに対し、一般社団法人そらの郷は、にし阿波地域の景観や文化を観光資源として活用し、教育旅行やインバウンド旅行の受入れを通じて、交流人口や関係人口の創出、地域経済の活性化、伝統農法や景観の保全、さらには、次世代への継承に取り組んでいる。

2018 年に本地域の「にし阿波の傾斜地農耕システム」が世界農業遺産に認定されたことから、これらの取組をさらに強化している。

3　むらづくりの内容

（1）生産面における取組状況

にし阿波地域では、農業体験や農家民泊、インバウンド旅行と連携することで農産物の付加価値を高めている。その結果、地域内での消費拡大と所得向上に加え、にし阿波の貴重で多様な雑穀や在来野菜の継続した作付けにも寄与している。

また、女性が主体となった加工品づくりや、若い世代による新商品・体験プログラムの開発が進んでいる。

こうした取組は、地域住民が活躍する機会の創出や、後継者の育成にもつながっている。

（2）生活改善の取組状況

にし阿波の「傾斜地農耕システム」を構成する急傾斜地の農地や石積み、独特の農法、伝統的な食文化を活用し、収穫体験やオーナー制度、農家民泊の受け入れなどを行っており、これらの取組を通じて、耕作放棄地の抑制や景観の維持を図っている。

また、観光客を受け入れるための安全・衛生研修なども実施しており、これが地域全体の生活環境の改善や、食品衛生・防災意識の向上につながっている。

教育旅行やインバウンド旅行の受入れでは、旅行者との交流を積極的に進め、継続的な関係の構築に努めている。

これらの活動により、住民の地域への愛着や誇り、地域内のつながりが育まれ、関係人口の拡大や、移住促進、担い手確保にもつながるなど、持続可能な地域づくりを支えている。

【農林水産大臣賞】

1　受賞団体：奥松瀬川地区

所在地：愛媛県東温市

代表者：会長　渡部　光右衛氏

2　むらづくりの背景・動機

奥松瀬川地区は、中山間地域に位置し、人口 300 人弱、高齢化率約 40％で、人口減少や高齢化、荒廃農地の拡大が進んでいた。この状況を受け、平成 23 年に集落営農組織「桜羅楽農会」を設立し、農業機械の共同利用や農作業受託などを開始した。

さらに、住民主体のワークショップや地域おこし協力隊の受入れを通じて地域の課題や魅力を共有し、平成 28 年には地域づくりを担う「奥松瀬川創生会議」を設立した。また、地域交流拠点「ほっこり奥松」や交流農園「ぽんぽこ農園」の開設などを通じて、地域活性化の取組を具体化した。

令和元年には「奥松瀬川地区農村活性化協議会」を設立し、農業振興、交流・観光、集落活動を担う各組織が連携する体制を構築した。現在、地域住民、移住者及び行政が一体となって、「とわに輝き歩み続け未来を語り合える奥松瀬川」の実現に向けた持続的なむらづくりを推進している。

3　むらづくりの内容

（1）生産面における取組状況

令和元年の協議会設立を契機に、水稲以外の特産品づくりを目指し、ユズ栽培を本格導入した。荒廃農地等を再生して栽培面積は 100a から 280a に拡大し、地域全体の荒廃農地の減少にも寄与した。令和 7 年にはユズの収穫・販売が始まり、加工品開発など 6 次産業化に向けた検討も進めている。

さらに、近年は日本ミツバチの養蜂や天然資源を原材料にしたドライフラワーリースの商品化に取組、はちみつの精製やリースの製作・販売に多くの非農家住民も参加して地域産業の活性化を進めている。現在、持続的な農地保全・管理体制の構築を目指して、一般社団法人設立による「地域まるっと中間管理方式」の導入や基盤整備を検討している。

（2）生活改善の取組状況

地域交流拠点「ほっこり奥松」では、セルフカフェや各種体験教室、直売所の運営などを行っており、年間利用者数 3,000～4,000 人で安定して推移するなど世代間交流の促進や、地域コミュニティの強化、交流人口の拡大、地域の認知度向上に大きく貢献している。

交流農園「ぽんぽこ農園」の運営や各種イベントの開催は、都市住民との交流を促し、農業を始めた人が 5 人、移住者が 2 世帯生まれるなど、地域活性化と担い手確保に成果を上げている。